特別対談企画 前編

新しいまちづくりを目指して

高田建築事務所のチャレンジ

エコとユーモア・そして間知（まち・町）づくり！

高田清太郎さん
㈱高田建築事務所代表取締役社長、
㈱フォレス・タカダ代表取締役
S48年日本大学理工学部建築学科卒

秋山孝さん
多摩美術大学教授、
秋山孝ポスター美術館長岡館長
S56年東京芸術大学大学院修了

今日は、斬新なアイディアに満ちた住宅建築をすすめ、街づくりをおこなっている高田建築事務所代表取締役で㈱フォレス・タカダ代表である高田清太郎さんと長岡市宮内出身で現在世界的に活躍されている多摩美術大学教授で秋山孝ポスター美術館長岡館長の秋山孝さんから街づくりにかける夢を語っていただこうと思います。よろしくお願いします。

松田　さて、お二人に対談をお願いするこの場所は、高田さんが開発されている分譲土地「リプチの森」にこのほどオープンした常設の展示場「リプチの森のたまご」です。

大変立派な「たまご」ですが、まず「リプチの森」というのは、どういう森なのですか？

「リプチの森のたまご・200年住宅」が誕生

高田　再び（リ）小さな（プチ）森をつくるということです。

「リプチの森」は、私どもが21世紀に向けた新しいまちづくり（分譲土地）をすすめるにあたってのモデルプランです。

松田宣治さん（新潟県経済雇用問題研究所理事長・弊社代表取締役）

総区画数は全部で48区画です。この新しいまちは「建築行為の中に植樹し育樹しながら森も一緒につくろう」と言うコンセプトでもあります。

そしてこの森に当社にとっては初めてとなる常設展示場をつくりました。これから住宅をつくろうとする方に、長い将来にわたってすばらしい生活をエンジョイしていただける住宅を提案するための常設のモデル展示場です。

それが今日の会場になっているこの建物です。このモデル展示場から「リプチの森」が大きく育っていきます。だからこの建物が、「リプチの森のたまご」になるのです。

敷地の条件を活かして1階に個室用のスペースを確保しました。ここは将来のライフスタイルに合わせて、寝室にもなるし、子供部屋にも自由自在に変化します。2階には30畳を越えるダイニングキッチンを用意しました。LDKという典型的な高居間式住宅です。

秋山　環境が抜群なんですよ。南西側に太田川の土手越しに川面を眺めて、田園風景の向こうには東山を眺望します。大変眺めが良いうえに、太田川ではカワセミや鴨の群れにも出会うことが出来るのです。

素晴らしいロケーションです。

松田　環境も設備も素晴らしいですね。このモデル展示場は、展示場という概念を越えて、高田さんの住宅にかけるロマンが凝縮しているように感じます。

高田　そうですね。「たまご」は、国交省が推進する長期優良住宅先導的モデル事業（200年住宅）でもあるのです。6年間展示場として活用し住宅産業の活性化に寄与するという国の構想による建設です。同時に当社にとっては初めての常設展示場ですので、力が入りました。200年先のことを考えた住宅として設計しています。

すまいづくりを計画されている方はもとより大勢の方から是非ともご来館いただき空間を楽しんでいただけるとありがたいです。200年先を見通した住宅を味わって欲しいですね。

200年住宅は先進のエコ住宅

高田　「200年住宅」は、住宅の“超寿命化”のため、構造・耐久性・長期の保障・環境への配慮など様々な評価によって選定される優良住宅なんですね。

構造体は超強固です。しかもエネルギーなどすべての面で自立循環型の「たまご」です。屋根には太陽光発電パネルを備えています。太陽熱利用によるソーラーでエネルギーをつくり、給湯・暖房機能を発揮しています。エネルギー面で自立しようとしています。太陽光と太陽熱を併用して次世代の省エネ基準に適合する先進のエコ住宅なんです。

雨水の貯水タンクも備えています。この水は災害時にも効果があります。サスティナブルな建築を目指していることから、柱・梁には「県産材」を使用しています。地域材の活用は地域の森林の計画伐採・植林による安定した木材の供給にも寄与しますし、それが環境保全にもつながります。

私どもは、県産材のほかにも和紙、珪藻土（けいそうど）なども多用してエコに寄与しています。床下には脱臭効果や吸湿作用のある木炭を敷設してあります。

「リプチの森のたまご」とは、生命を宿しているエネルギーをイメージしています。

松田　住宅が“自立する”のですね。

高田　それ自体で自立する住宅と考えています。ライフラインという考え方に対して、ライフスポットと言う考え方ができますね。新潟県は二度の大震災に見舞われたばかりです。ライフラインもズタズタにされ復旧には時間を要し生活に不便をきたしました。災害時に、ライフラインがシャットダウンしても、ライフスポットで自立できるようにするのがコンセプトです。時間の経過とともに、これから時期が来て殻が割れる。そのときどんな成長をするのか、とても楽しみです。

松田　新しい街づくりの試みが日本中に種としてまかれて、いずれ芽を出して成長していくのですね。そのような成長の第一歩に「リプチの森のたまご」が存在します。

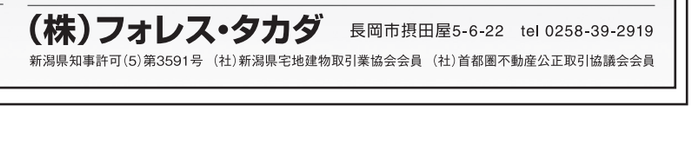
高田　「リプチの森のたまご」は、いわゆる200年住宅です。100年ではなく200年もつ家です。超長期にわたって数世代の家族が快適に住み続けることができるように、内装や設備の清掃・点検が容易にできるよう設計上でいろいろ工夫しています。

たとえば電気の配線や給排水などのメンテナンスがしやすいようにあらかじめ配管しています。外壁の塗装なども同様に工夫しました。この工夫のおかげで、設計住宅性能評価維持管理対策等級（専用配管）の等級3を確保しています。

それによって200年もつわけです。法隆寺が1300年もったというのは、メンテナンスの歴史です。

松田　きっと人に優しい成長をしていくのでしょうね。

（左上〈続く）



緩やかな曲線を描く「リプチの森」の風景

常設展示場「リプチの森のたまご」外観

（右下より続き）

美術館も、介護施設もあります

高田　今、「リプチの森」には20家族が住んでいますが、これからのまちは、住宅だけでなく、店舗もあり、福祉施設もあり、地域交流施設もあり、バラエティに富んだまちづくりが必要だと思います。摂田屋は醸造業のまちです。歴史ある風景と連携しながら相乗効果を高めていけたらと思っております。折りしも今年の7月12日に宮内に秋山孝ポスター美術館長岡が開館しました。秋山先生は長岡市宮内の出身です。この美術館は宮内商店街にある旧銀行の建物で現在は歴史的建造物になっている建物をリノベーションして使用しています。

また、近々、地域密着型介護拠点（サテライト）特別養護老人ホーム＋小規模多機能施設＋地域交流施設を合築した「プチリプチ」（仮称）がリプチの森に開設されます。これにより従来の大型施設ではなく、“住み慣れた町の中”でお年寄りと子供達が交流しやすくゆったりと過ごすことができます。家々が肩を並べたシルエットで住宅群の中に溶け込むようにデザインされています。

このような施設の充実が街づくりを進展させるはずです。

秋山　今の長岡のまちだと、まちが大きすぎて、車で買い物に行かなければなりません。車に乗って買い物に行けない人はどうするのか。川向こうに大きなスーパーマーケットがあって、そこに全て依存していると、老人たちや子供たちはどうしたらいいのでしょうか。

そうではなくて、まちの中を歩いてコミュニケーションをとりながら野菜を買ったり、近くに行きたい病院や学校があったり、美術館がある。そのようなまちが理想ですね。

そうなればまち自体に人が集まる理由がはっきりしてくる。文化のあるまちができますよね。

高田　新しいまちづくりというと田圃を造成したり山を切り崩したりして開発していきます。結果、ある日突然、建築物塊が出現するわけですから半暴力的に風景を変えてしまう事になります。

そうでは無く、むしろ古い町の中に新しいまちを馴染ませていく方法のほうがとても自然なわけです。結果的に記憶を継続しながら過ごしやすい町ができあがってきます。

松田　新旧・老若男女・様々世帯が同居することになりますから本当に自然ですね。

高田　計画者ではなく生活者としての視点が大切ですね。近代都市計画の計画者は働く場所・住む場所・遊ぶ場所・交通網の4要素で分割・連結させました。完全分離することで機能優先になってしまい大型化することですごしにくい町になってしまいました。

合理的過ぎる計画は生活するに人たちの余裕をけそいでしまいます。

歴史の上に成り立っていくまちはいいものです。

秋山　建国200年足らずのアメリカの都市づくりは、突然、まちを浮上させます。ところがこの宮内や摂田屋には歴史があります。新旧もあるし、歴史や学校、文化があって酒造りもある。代々住んでいる人がいて、そこに新たなまちをつくるのですね。

高田　歴史の上に成り立って行くまちはいいものです。それらを無視して人々が勝手に計画すると時間の流れを切断することになります。

空気を積み重ねてき歴史には絶対に勝てません。空気の中には記憶があって、その記憶の上にまちをつくって来たのですから、それを大切に育てて行きたいですね。

秋山　最近、「まち起こし」と称して古いまちをそっくり舞台小屋みたいに、「これが古いまちですよ」と日本のあちこちにつくっていますが、そこに行くと落ち込みます。まちが生きているかどうか、活性化して、その人たちの役に立っているかどうかが大事です。観光客のためのまちづくりは、あまりいいとは思えないのです。

たとえば、宮内につくった「秋山孝ポスター美術館長岡」は自慢ではないけれど悪くない。もうすぐ85歳になろうとしている建物を高田建築事務所さんにリニューアルしていただきました。あまりいじらないけれども、非常にレベルの高い耐震の構造になっています。

この建物の思いを残そうと、「火の壁」と呼んでいる壁があります。第二次大戦のときにB29が何百個と落とした焼夷弾で長岡の街が燃えたときに、この壁の前で火が止まったのです。そのおかげで摂田屋のまちが生き延びました。僕はそれを聞いたときに本当に感動したのです。

もう一方の壁は「地の壁」と呼んでいます。その壁の窓ガラスは中越地震でひび割れたままにしてあります。その災害を忘れないために透明なガラスを貼って、刻み込みました。素晴らしいと思いませんか？建物や街というのは全部新品にするのではなくて新旧が織り交ぜてあるといいのです。それに呼応しているかのように、「リプチの森」ができあがっています。リプチの森もいつのまにか古いまちに混じってきれいなまちになっていくのですね。

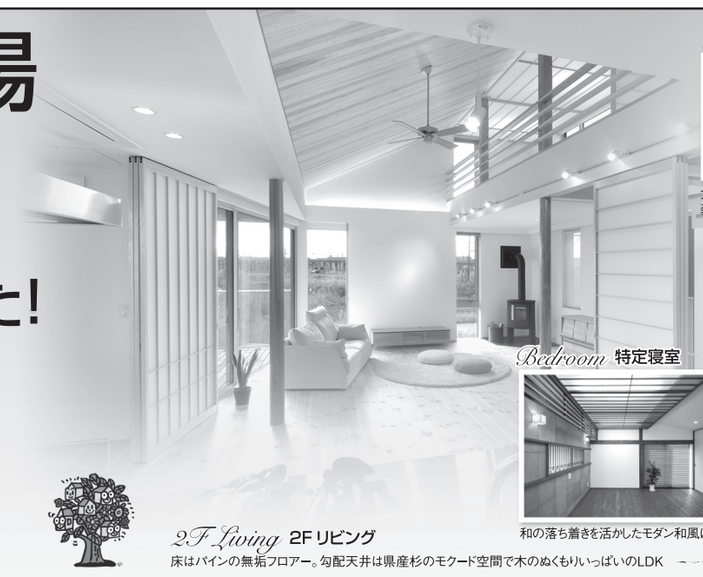
（次回12月10日号〈続きます）

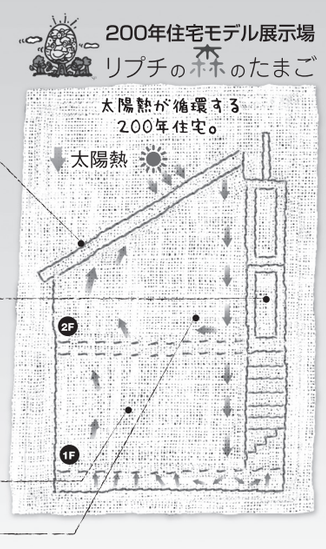
常設展示場「リプチの森のたまご」２Ｆで対談中の高田氏（中央）、秋山氏（右）、松田氏（左）

ロフトから見下ろした「リプチの森のたまご」２Ｆ

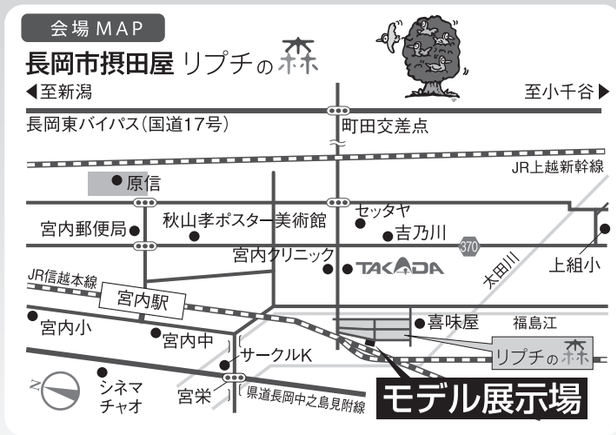
常設展示場
200年住宅
モデル展示場
オープンしました！

「200年住宅とは」
住宅の長寿命化のため構造・耐久性・長期の保障・環境への配慮など、様々な評価によって選定された優良住宅のことです。





「リプチの森のたまご」の見学をご希望の方は
tel.080-4061-0886 までお電話ください



◉お問い合わせ先・建築設計施工
TAKADA DESIGN IS SIMPLE & SPACE IS FLOWING
（株）高田建築事務所　新潟県知事許可（特-20）第16730号
tel.0258-36-1230
本　社／長岡市摂田屋5-6-22
新潟営業所／新潟市中央区女池南3-5-15　tel. 025-284-4700
www.takada-arc.com
E-mail:info@takada-arc.com

◉売主・宅地造成企画
（株）フォレス・タカダ　長岡市摂田屋5-6-22　tel 0258-39-2919
新潟県知事許可（5）第3591号　（社）新潟県宅地建物取引業協会会員　（社）首都圏不動産公正取引協議会会員